

ま
見せない!

しょうねん
少年

さ ない
左内



～「やけひばし」の^{まき}巻～

さく:あだち しょうけい

え:ともちゃん

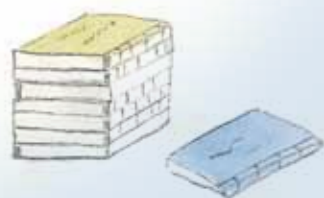
《おことわり》

このお話は、『越前人物志』（福田源三郎編、明治43年刊）に掲載されている橋本左内の幼い頃の話をもとに、脚色をおこなったものです。話中の全ての部分が必ずしも史実ではありませんので、ご了承ください。



いまからおおよそ170年前、江戸時代のおわりごろ、天保5年（一八三四）という年の3月11日、福井城下の常盤町、いまの福井市春山2丁目に、左内という男の子が生まれました。

左内のおとうさんは、「御殿医」という、お城につとめるお医者さんでした。



左内は小さいころから頭のよい子として大変な評判でした。

7歳のころから塾に通っていっしょうけんめい勉強しました。もともとバツグンに頭がよいうえに、勉強が好きで好きでたまらないという性格でしたから、当然、学力はどんどのびで、先生でさえ左内の勉強ぶり、上達ぶりには感心するほどでした。

漢字ばかりで書いてある、大人でも読むのがむずかしい中国の本を、すらすらと読んでその意味がわかったといえますから、これはかなりの秀才です。



しかし左内は、勉強ができることを自慢したり、威張ったりはしませんでした。

でも、同じ塾に通うまわりの子供たちは、左内がいつも先生にほめられるのがおもしろくありません。

左内をいじめようとたくらんだ子供たちは、「左内のちび」「女の子みたいなやつ」とかげ口をいいました。じっさい、左内は背が低くて女の子のように色白で、ほっそりした体つきでした。

弱い人は自分より弱そうなものだけをえらんでいじめるものです。残念ながら今の時代もなにも変わっていませんね。しかし、みなさん。背の高さや体つきをその人の欠点のように悪くいうのは、一番ひどきようなことだと思いませんか？左内は、そのような自分へのかげ口は無視していました。



左内が12歳さいになった冬ふゆのある日ひのことです。

塾じゅくの先生せんせいの息子むすこが栗くりを小刀こがたなでむいていたら、「いたいよ。」

かわいそうに、中指なかゆびの先さきを切きってしまいました。

これをじっと見みていたのが、左内さないをやっつけてやろうと隙すきをうかがっていた意地悪いじわるな子供こどもたちでした。

「そうだ。左内さないを困こまらせるのは今いまがチャンス。」

そう思おもった一人ひとりがすかさず左内さないにこういいました。

「左内さない、お前まえは確たしか医者いしやの息子むすこだったよな。医者いしやの子こならこれし

きの怪我けがくらいなおせるはずだろ？はやくなおしてみせろよ。」

この頃ころは、自分じぶんが生まれた家いえによって、その子この将来しやうらいの職業しやくぎや身分みぶんが決きまっています。医者いしやの子こは医者いしやとなるのが運命うんめいです。

左内さないもいつかはお父とうさんのあとをついで医者いしやにならなくてはなりません。でも、まだ12歳さいの左内さないは医学いがくを学まなんでいません。怪我けがをなおせるはずがないのです。

意地悪いじわるな子こどもたちはそれをわかっていて、わざとそんなことをいって、左内さないに恥はじをかかせてやろうとしたのです。



ところが、左内はなぜかあせりもせず、平気な顔で、「よし、なおしてやろう。」

と簡単に答えるが早いか、そばにあった火鉢の中の火箸をとりだしてきて、その子の傷口に押し当てようとなりました。

それを見てびっくりしたのは、左内に意地悪なことをいった子どもたちでした。

「なにをするんだ。乱暴な。先生にいいつけてやる。」仲間なかまの一人ひとりが青あおくなって先生せんせいのところにとんでいき、すぐさま報告ほうこくしました。

話を聞いておどろいた先生は、すぐにその場ばにかけて左内さないにそのわけをたずねました。

「左内さない。おまえともあるうものが、なんという乱暴らんぼうなことをするのか。」



左内は、乱暴なことをしようとしたわけを先生に話しました。

「私は、医者の子ではありませんが、まだ切り傷の治療法は父から教えてもらってはいません。でも、やけどの手当ては教えてもらっていますので、ま
ず傷をやけどにしておいて、それから手当てを
しようしました。」

こんなことをすつきりとした顔で答える左内に、
先生もほかの子供たちもあっけにとられてしまいま
した。と同時に、左内の負けず嫌いの性格と発想力
に舌を巻いたのでした。

去稚心

稚心ちしんを去るさ

振気

気きを振ふるう

立志

志こころざしを立たつ

勉学

学がくに勉つとめる

択交友

交友こうゆうを択えらぶ



橋本左内はしもとさない 『啓発録けいはつろく』

つまらないけんかや幼稚ようちないじめを相手あいてにせず、理屈りくつで相手あいてを降参こうさんさせたわけですね。

これから三年後ねんで、左内さないは、幼い心おさなこころを捨てて立派りつぱな大人おとなになろうと自分じぶんにいい聞かせるために『啓発録けいはつろく』というものを書かきました。これは、今も福井の子供こどもたちに読よみ継つがれています。



おしまい